

平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：33918

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26780467

研究課題名(和文)ハンセン病療養所を活かした学習プログラムの開発に関する研究

研究課題名(英文)Development of a learning program takes advantage of a Hansen's disease sanatorium

研究代表者

小林 洋司(KOBAYASHI, Yoji)

日本福祉大学・社会福祉学部・助教

研究者番号：10636591

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的はハンセン病療養所を活かしつつ、ハンセン病回復者と協働した学習プログラムを開発することである。具体的に3点の研究課題を設定し、検討を行った。

研究成果として、フィールドワーク、アンケートを通して全ての療養所で将来構想に関わる準備が円滑に進んでいるわけではないこと、そして来園者の受け入れ体制が不十分であることが明らかになった。療養所において来園者を受け入れる側の職員からの聞き取りを通して、語り手自身の学びが、語りかける相手としての学習者の学びと強く関係していることが明らかになった。ワークキャンププログラムの実施を通して、講義型の学習とは異なる意義を見いだすことができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is Empirical study of a future plan of a Hansen's disease sanatorium, Analysis of the reality of the Staff's learning, Consideration of the program which promotes learning

In study 1, it became clear that an acceptance system of the learner is insufficient by a questionnaire survey. In study 2, it was revealed that learning of staff oneself was strongly related with the learning of the learner by an interview survey. In study 3, it was possible to find the significance different from learning of the lecture type by a work camp program.

研究分野：社会教育

キーワード：社会教育 福祉教育・ボランティア学習 ハンセン病問題

1. 研究開始当初の背景

本研究は、2014年から開始され、昨年度2018年に一つの区切りをつけることとなった。2014年当時には、療養所に生活をするハンセン病回復者の平均年齢は82歳であったが、2018年には86歳を超える状況になっており、ハンセン病問題をめぐる学習の重要性は増す一方である。しかしながら、教育的なアプローチ、すなわち、ハンセン病問題を教育現場においてどのように授業のテーマとして展開するか、または教育・学習として何をどのように伝達していくことが望ましいのかということを中心とする研究は依然として極めて少ない。確かに、1996年のらい予防法廃止、2001年のハンセン病国家賠償請求訴訟の勝訴、ハンセン病問題基本法の成立を契機にハンセン病問題の社会的認知は高まり、入所者の話を聞きとったり、ハンセン病療養所を訪問したりする機会と実践そのものは飛躍的に増加した。このことは、本研究期間中に取り組んだ調査結果からも明らかである。関心が高まりをみせている状況を受けてハンセン病問題の教育的観点からの研究は、これまではもとより、今この時代、時期においてしか成し得ない研究であるとともに、今後の社会問題と言われる問題について考察する際に、非常に重要なモデルを提起する研究であるといえる。

2. 研究の目的

本研究の目的はハンセン病療養所を活かしつつ、ハンセン病回復者と協働した学習プログラムを開発することである。具体的な研究課題として、

<研究1>ハンセン病療養所が統廃合されつつある状況を踏まえて、その将来的な経営、活用の実態がどのようになされようとしているのか、その実態を明らかにすること。

<研究2>ハンセン病問題を学ぼうとする学習者に対して実際に学習プログラムを構築・実施することを通してその成果と課題を明らかにすること。

<研究3>学習プログラムがハンセン病療養所にもたらす教育効果以外の効果について検討すること。

以上3つの研究課題に基づいて研究を進めていく。

3. 研究の方法

研究方法としてそれぞれ以下のような手順で行なった。

<研究1>

ハンセン病療養所の将来構想がどのような意図から、どのように進捗しているのかの実証的研究については、将来構想の重要事項である、療養所における教育・学習の実態についてフィールドワーク、アンケート調査によって明らかにする。

<研究2>

ハンセン病問題を学ぼうとする学習者に対して実際に学習プログラムを構築・実施することを通してその成果と課題を明らかにすることについては、<研究1>のフィールドワークにおいて先進的な活動を行なっている場所を選定し、その施設および活動にかかわるキーパーソンへインタビュー調査と、岡山県瀬戸内市の邑久光明園において学習プログラムを企画し、アクション・リサーチを行なった。

<研究3>

学習プログラムがハンセン病療養所にもたらす教育効果以外の効果についての検討は、<研究1><研究2>で明らかになった知見が先行研究との関係の中でどのような位置にあるかを文献に基づき検討する。

4. 研究成果

<研究1>、<研究2>、<研究3>それぞれの研究課題に対応させて研究期間中の成果について報告する。

<研究1>については、ハンセン病療養所が統廃合されつつある状況を踏まえて、その将来的な経営、活用の実態がどのようになされようとしているのか、その実態を資料収集及びフィールドワークによって明らかにするべく、いくつかのハンセン病療養所の現状のリサーチを実施した。将来構想を提示し、その実現を進めている現在の療養所の実情を調査した。現在、様々な要因から将来構想として具体的な活動を展開している園ばかりではないが、多くの療養所において交流館、資料館、歴史館等の開設が進められつつあり、医療・福祉施設としてのみならず、歴史や、療養所に生きた人間の生き様をも合わせて残すというビジョンのもと療養所の未来が構想されている。そのなかでとりわけ教育・学習を重要な営為として位置付けようとする萌芽が見られている。

期間内に行なった教育・学習の実態を明らかにした調査では、2017年度、1年間でおよそ48,337人がハンセン病療養所を訪れているが、療養所で生活する入所者の中で講話というかたちで対応できるのは38人しかいないという実態が明らかになった。このことは高齢化等の理由により入所者が直接対応できる状態は極めて難しくなっていることを示しており、この調査からも、療養所においてハンセン病問題を学ぶ方策については喫緊の課題であることが確認された。

<研究2>については、<研究1>で訪問したA療養所内に所在するB施設の職員Cへのインタビューを実施した。職員Cからは、C自身が主体的に関わったハンセン

病に関わるプロジェクトをきっかけにして問題に関心をもつようになり、現在は教育・学習を企画する側になっていること、そのなかで「(自分自身が)差別をする可能性がある存在であることを落とさない」という言葉にも代表されるように、学習者それぞれが「わたし」とハンセン病問題がどのようなところでつながり、なにを考えていかなければならないのか、ということについて考慮したプログラムづくりが重要であるという知見を得た。その知見を踏まえてハンセン病問題を学ぼうとする学習者に対して実際に学習プログラムを構築・実施するべく、2016年度にD療養所において1週間近くにわたる学習プログラムを実施した。参加者の中には、<継続的に参加するケース>や、<10年前に初めてハンセン病問題について知った学習者が10年近くの時間を経て再度ハンセン病療養所に訪れ、当該プログラムに参加したケース>、<初めて参加する学習者>が多様な形態で参加していた。

継続的に参加する学習者からは、「ハンセン病療養所での当該活動がライフスタイルになっている」ということば、<10年ぶりに参加した学習者からは、「10年前の活動、経験が現在の自分の道標になっている」ということば、初めて参加する学習者からは、興味があって参加したが、継続的に参加するメンバー、10年ぶりに参加するメンバーとの関わりを通して「ハンセン病に関する興味が高まった」ということばを聞き取ることができた。このように、プログラムを開催することで、ハンセン病問題に関わる知識が深まるとともに、ハンセン病療養所で学習プログラムを続けることの意義も新たに確認された。

<研究3>の学習プログラムがハンセン病療養所にもたらす教育効果以外の効果について検討することについては、<研究1

>、<研究2>で明らかになった知見を併せて考察すると以下のようなポイントを指摘しておきたい。

現在、様々な要因から将来構想として具体的な活動を展開している園ばかりではない。しかし、多くの療養所において交流館、資料館、歴史館等の開設が進められつつあり、教育・学習が将来構想において極めて重要な営為であることが明らかになった。

療養所において、療養所を活かしたかたちで実践を考えようとするとき重要になってくるポイントは、「学習者それぞれが「わたし」とハンセン病問題がどのようなところでつながり、なにを考えていかなければならないのか」ということである。このことは本研究においてCさんからの聞き取りで確認されたことである。そうした知見を参考にしながらD療養所でプログラムを企画し、実行した。その中で明らかになったのは、多様な参加者が参画できるプログラム、ハンセン病療養所と「わたし」の関係を創り上げることができるプログラム、

多様な参加者（学習者）が相互に関わりあうようなプログラム、継続してプログラムを行うこと、継続が可能なプログラム、あるいは人的組織の様態を検討することが重要であることが明らかになった。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

小林 洋司, 人権をめぐる学習活動といのちの持続性 ~ESD とハンセン病問題学習の関係性に注目して~, 日本福祉教育・ボランティア学習学会年報, Vol.24, 2015, p45-53, 査読無

〔学会発表〕(計 1 件)

小林 洋司「ハンセン病問題に向き合う福祉教育・ボランティア学習の探究」, 日本

福祉教育・ボランティア学習学会第23回長野大会, 2017年12月3日, 長野大学

6．研究組織

(1)研究代表者

小林 洋司 (KOBAYASHI, Yoji)

日本福祉大学・社会福祉学部・助教

研究者番号: 10636591